

平成紙



おりおりの記

祖国のない人達

東海東京フィナンシャル・ホールディングス
代表取締役社長 最高経営責任者

石田 建昭

1994年の秋。ロンドンのトレーディングルーム（日系金融機関）は緊張感に覆われていた。一国の首脳が発したメッセージに、“非合理性”を嗅ぎ取り、“ゆがんだ”市場の動き（価格）に狙いを定めた。Hトレーダーをリーダーとする債券・デリバティブチームがBunds（ドイツ国債）の先物を買占めた。いわゆるスクイーズ（凍結・買占め）に走ったのである。

勝てば巨額なプロフィット。外れれば……。

そのトレーダーH氏は青白い顔で神経質な仕草の持ち主。早朝から夕方まで電話のレシーバーを離さず、集中力を高める。1日も、1週間も、1ヶ月も…そのストイックな密度の濃い一途な生活は永遠につづく。彼の家族は建国された土地を離れ、ヨーロッパに暮らす。いわば祖国のない人達。その家族の研ぎ澄まされた神経と鉄壁の意思。日本では見ることの出来ない人達である。

一方、口ひげをはやし、人なつっこい顔のアービトラージポジション（金利・通貨）チームのキャプテンK氏。

汚れた息を吐き、目を赤くはらして早朝の挨拶をするK氏の表情は、徹夜で市場をウオッチしていたことを示している。

ルール違反の過剰ポジションを指摘されても、悪びれもせず、あいまいな笑顔で弁解を繰り返す。そのしたたかさ、しぶとさ。彼の父は、パーレビ時代のイラン政府の大臣。革命によりイギリスに亡命した家族。

彼ら“祖国のない人達”のネットワークは広く厚い。インナーサークルだけが共有する貴重な情報。その情報をベースに繰り広げられる巧妙な駆け引き。

“善と悪”“清と濁”“好と嫌”…などを超越し

た“強欲の”世界。それが国際金融の中心地、“ロンドンのシティ”の一面。繊細さ、獐猛さ、そして敏捷さを兼ね備えていなければ敵に食われてしまう。野性の世界。

私は彼らに問いかけた。“チームメンバー、仲間を選ぶ基準は何か？”

答えは：

- ① 一流の大学院卒（修士、博士）で数理センスがあること
- ② バルジ・ブラケットの金融機関（投資銀行）で働き、人的ネットワークを持っていること
- ③ アルコール嗜好が無い又は少ない（アルコールは脳の細胞を破壊すると信じている）こと
- ④ 身体そして常に精神が堅牢なこと
- ⑤ 祖国のない人達

（祖国を持つ人達は、一回の成功、一時の大金で自己規律をなくし、極度の緊張感を保てなくなる）

国際金融シティ“東京”が魔性のグローバルマネーを惹きつけるための秘策。それは才能と運命を信じ、壮絶なバトルを演じるグリーディーな人たちに“自由”というフィールドを提供できること。

“和をもって貴し”の国、日本が“真の改革”ができるかどうか。今、世界は注目している。

